平八郎物語

翠牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平八郎物語

【Ｎコード】

Ｎ９３３９Ｆ

【作者名】

翠牙

【あらすじ】

夏休み。高校2年生の少年、大翔は、祖父である平八郎の家に、泊まりに行った。日常的なことなのだが…。

第一話　平八郎宅にて

高校2年の夏休み。

俺は、この休みを利用して、祖父の家に泊まりに行くことにした。

当日、取りあえず祖父の家まで、兎跳びで行った。

（何やってんの！？）……疲れた。

（そりゃそうだろ。

）でも、意外にすぐ着いた。

（えっ！？）だって、俺ん家の敷地内にあるから。

（そーゆーことか…）まぁ、そんな冗談は置いといて、（冗談なのかよ！！）いや、ホントにしたけどね。（どっちだよ！！）祖父の家の玄関の引き戸を勢い良く開けた。すると、不思議なことに、引き戸は、そのままの勢いで閉まった。（そりゃね）もう一度ゆっくる開けると、さっきの引き戸の開いた音で気付いたのか、家の中から、祖父が出て来た。ちなみに、祖父の名前は平八郎。（これからは、祖父のことを『平八郎さん』と呼ばせていただきます。）平八郎さんは、玄関先に立っている俺を見て、不思議そうに言った。

「…学校はどうしたんじゃ、大翔？」

（あ、『大翔』は俺の名前。）…平八郎さんは、決して、痴呆症などにかかっているわけではない。単に俺が、すでに夏休みに入っているということを、言っていないだけの話なのだ。俺は、平八郎さんに優しく微笑んだ。

「夏休みなんだよ。」

「…そうかい。」

真夏の太陽が、平八郎さんの美しく輝く頭皮に反射して…（遠回しに言わなくていいよ）

「…ところで…」平八郎さんのその一言に、俺は澱粉を糖に変えるはたらきを持つ液体（唾液でいいよ）を呑んだ。

「…なんで大翔は、そこに居るんだい？」

「…うん、ファンタある？」
「はんた？」
「うん、ファンタ。」
「はんたはないのう…。ファンタならあるんじゃが…。」
（…話が噛み合っていない部分が多少ありますが、御了承下さい）
俺は、台所に行くと、冷蔵庫を開け……なかった…。
開けても、冷蔵庫の中にファンタが居る可能性があまりにも少なすぎたからだ。なぜならファンタは、この台所のどこかに、常温で保管されている可能性が高い。この真夏の真昼に、このサウナのような台所で、常温で保管されているファンタは、いくら防腐剤が入っているとは言え、ファンタは平気でも、俺が危険だ。俺は取りあえず、丁度台所に来た平八郎さんに言った。
「…泊まりに来た。」（場面が違うよね！？それに、さっき平八郎さんが
「なんでそこに居るのか」って聞いて来た時に言う答えだよね！？）
「…ファンタ冷やしてなかったじゃろ？」（また話が噛み合ってない…）
幸運にも、冷蔵庫の中に居た麦茶を出して、コップに注いだ。
ほのかに水色がかったコップは、太陽の光を取り込んでいる。
平八郎さんが、湯飲みを差し出してきた。
…注げと言うことか。
湯飲みを受け取ると、湯飲みの中に少量の水が残っており、生命を絶たれた小さな生き物（要するに、虫）が浮いていた。
俺は構わずに、その上から麦茶を注いだ。その小さな生き物は、浮き沈みしながら、次第に上に上がってくる。俺は、それをそのまま平八郎さんに手渡した。平八郎さんは、何も言わずに、それをそのまま飲み干してしまった。…その小さな御遺体は、麦茶と共に、平八郎さんの胃の中で消化されてゆくのでありました…。

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9339f/

平八郎物語

2011年1月19日15時19分発行